

## 二歳半の記憶

昭和二十二年、戦後まもない頃の父の実家では、父の長兄が家長で一族十五人ぐらいが生活していた。農家で馬も飼い養蚕も盛んだった。道路は舗装はなく荷馬車が行き来し、自動車は珍しい頃であった。自分は昭和十九年十一月生れであるから二歳半頃である。父は結婚後しばらく実家の離れに部屋住まいをしていたのである。

その頃の記憶として、一番古いものは、父の母のおおばばから「ほれ抱いてやるでこい」と言われて懐に飛び込んだことである。そのおばあさんがある日、階段から落ちて「あいたた、あいたた」といってしゃがんでいる光景をだまって見ていた。それしか記憶にないがその後亡くなったようである。葬式の記憶はない。ここで記憶は途切れる。

食事は大勢で各自お膳を並べ、二列に向かい合ってならば、一番奥にこちらを向いておじいさんが座っていた。にぎやかな食事だった。僕の隣にはいとこにあたる周子姉ちゃんがいて、たくあんをポリポリいい音をたてて食べていた。何かうるさいくらいにポリポリと食べていた。その周子姉ちゃんがある日母親たる静江おばあちゃんに「なんだ ふんとに」と怒られていたのを記憶している。あとで聞いたところでは、嫁ぎ先から逃げ帰ったとのことだった。ここで記憶は切れる。

その次の記憶は、ある天気の良い春の日だった。「勝っちゃん(僕の呼び名)、裏へ行って、じじ、お茶だじって言ってきてくりや」といこの真佐子姉ちゃんに言われて、小さな手作りのわらぞうりをはいてチョコチョコと五十メートルばかり歩いて裏の畑に行き「じじ、お茶っ」と叫んだ。そうすると、じじが喜んでニコニコしながら顔を上げ「あーはは、おーおー」といって手を休め「今いくでな」と言った。当時幼児は僕だけだったので、皆でおもちゃにして遊んでいたそうである。そこで記憶は途切れる。

その後はもう三歳に近い秋だったと思う。父が仏間で誰か布団で寝ている人の傍らで号泣している姿をじっと見ていた。一体何なのか分からなかったが、物心ついてからじじが亡くなったのだと知った。そして、葬式の日と思われるが、房雄おじさんに「勝っちゃん、裏へ行って納棺だじって言ってきてくりや」といわれ、ちょこちょこ歩いてゆき、意味も分からず言われたとうりに「納棺だじ」と叫んだら、親戚の人たちが「納棺だ」と言っただけで飛び出してきた。

これらの幼い頃の記憶は、自分の原風景として心に残っている。まだ、無我の幼子ながら何か驚きや新鮮味を感じて記憶に残ったのであろう。